

ヨーロッパにおけるグリーン・ ツーリズムの展開について

横 山 秀 司

1. はじめに

第2次世界大戦後のヨーロッパでは、戦後復興をほぼ終えた1960年代、人々の生活水準の向上と、余暇時間の増大によって、夏は緑豊かなアルプス山麓、あるいは太陽と砂浜の地中海沿岸のリゾート地で、冬もまたアルプスのスキーリゾート地で休暇を過ごすというマス・ツーリズムが一般化した。特に、自家用車による観光や飛行機を利用したパッケージツアーの普及した1970年代以降、イタリア、フランス、スペインの地中海沿岸のリゾート地の発展はめざましかった。しかしながら、短期間に観光客が過度に集中することにより、観光地・リゾート地における環境破壊や景観問題が顕在化した。このようなマス・ツーリズムの反動として、豊かな自然をもち、静かな農村地域で休暇を過ごそうと考える人々も現れるようになり、農村地域での観光、すなわちルーラル・ツーリズムは新たな展開をみせるようになった。やがてそれは、ドイツやスイスのソフト・ツーリズム、イギリスのグリーン・ツーリズムの浸透と相俟って拡大し、今日では持続可能な観光の一つスタイルとみなされるようになった。

このような流れの影響を受けてわが国でも、近年、ヨーロッパのルーラル・ツーリズムあるいはグリーン・ツーリズムを指向する動きが見られる

ようになった(山崎他,1993,井上他,1996)。また農林水産省は,1995年4月,「農山漁村滞在型余暇活動促進法」(農山漁村型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律)を施行した。これは,農作業体験施設など余暇活動のための基盤整備や農林業体験民宿業の登録を内容とするもので,わが国におけるグリーン・ツーリズム推進のための法的制度として最初のものとして位置づけられている。市町村レベル,あるいは民間レベルにおいても果樹や花卉などのもぎ取り・即売というような従来からの観光農園から,近年では,ドイツのクラインガルテンを模倣した観光菜園,田植えや稲刈りなど体験農業を取り入れた新しいスタイルの農村観光への展開が見られるようになった。

しかしながら,ヨーロッパのグリーン・ツーリズムは,あたかも農家民宿あるいは農業体験を中心にしたツーリズムであるかのような紹介がなされ,国や市町村レベルでのグリーン・ツーリズムの普及を目的とした事業も,その実践に重点が置かれている。このようなわが国でのグリーン・ツーリズムの概念や取り組みは,ヨーロッパで推進されているグリーン・ツーリズムとは若干ニアンスを異にする点があるように思われる。そこで,本稿ではヨーロッパにおけるグリーン・ツーリズムの展開過程を概観し,グリーン・ツーリズムの本質を明らかにしたい。

2. ヨーロッパにおけるルーラル・ツーリズムの展開と ソフト・ツーリズム

近年,ヨーロッパ先進国では,従来夏季に集中してとっていた3~4週間の長期休暇を短縮し,短期の休暇,あるいは週末の休暇をとる人々が増えた。それに伴い,それまでのアルプス山麓,地中海や北海沿岸地域のリ

リゾート地の他に、国内の保養・観光地を訪れる機会が増大し、その目的地の一つとして自然が豊かで、伝統的景観の残る農村地域の人気が新たに高まった。

農村地域で行われる観光をここではルーラル・ツーリズムとよぶことにするが、しかし、Lane(1994)が指摘しているように、農村地域での観光のすべてがルーラル・ツーリズムではない。Lane はルーラル・ツーリズムと都市およびリゾートツーリズムを表1のように対比してまとめている。そ

表1 都市・リゾートツーリズムと農村ツーリズム

都市・リゾートツーリズム	農村ツーリズム
開放空間が少ない	開放空間が広い
1万人以上の定住者	1万人以下の定住者
人口密度が高い	人口密度が低い
ビルの環境	自然環境
多くの室内活動	多くの屋外活動
社会資本—集約的	社会資本—弱い
多くの催し—小売が基礎	個々の活動が基礎
多くの設立物（施設）	少ない設立物（施設）
国内・国際的会社	地方の会社
終日の観光を含む	多くの時間制の旅行を含む
農林業を含まない	いくらかの農林業を含む
旅行者の利益は自らがサポートする	旅行者は他の利益をサポートする
従業員は仕事場から離れて住む	従業員は仕事場の近くに住む
季節による影響は少ない	しばしば季節に影響される
多くの客	少ない客
客の関係は匿名	客との個人的関係
専門的経営	素人経営
国際的雰囲気	地方的雰囲気
多くのモダンな建物	多くの古い建物
進歩的／成長する道徳	保守的／発達が限定された道徳
一般にアピール	特殊な人にアピール
幅広い市場開拓	市場開拓無し

(Lane, 1994)

ここで示されたルーラル・ツーリズムの主要な特徴は、人口1万人以下の農村において、自然環境のもとで活動し、その行動の中にいくらかの農林業体験を含み、その村の農牧業を支えていること、農家民宿など素人経営によるものであり、客との個人的関係をもつこと、ローカルな雰囲気があり、多くの古い建物がある農村地域であることをあげている。すなわち、ルーラル・ツーリズムは、農村地域の野外活動中心のツーリズムであっても、外部の資本による規模の大きな近代的施設でのツーリズム、例えばスキーやゴルフ、リゾートマンションでの保養とは明らかに区別される。つまり、ルーラル・ツーリズムとは、自然的・文化的に多様性のある農山村に滞在して、散歩、登山、冒険的休暇／野性的休暇、カヌー、クロスカントリースキー、雪靴ツアー、低密度の滑降スキー、野外での自然観察、野鳥観察、狩猟、サイクリング、乗馬、風景の観賞、農村遺産の学習、小さな町や村のツアー、農村環境を享受するリラックスした休暇、小集会・会議、村祭り、川や運河での釣り、オリエンテーリングなどの余暇活動を行うものである (Lane, 1994)。

ルーラル・ツーリズムがヨーロッパで広まるのは、産業革命以後である。19～20世紀、工業生産や工業都市の拡大に伴って、都市内部の環境が悪化し、都市生活者のストレスが高まってきた。そのため、貴族や産業資本家層だけではなく、一般大衆も自然環境に恵まれた緑豊かな農山漁村へ旅行し、休暇を過ごすようになった。ルール工業地帯の南方のザウワーランドにある Möhnesee (ルール地方の水源として建設されたダム湖) 周辺の農村地域のように、1920年にルールの都市と鉄道によって結ばれたことによって、ルールの人たちの保養地として賑わいをみせたのは(注1)、その一例と言える。

さらに、第2次世界大戦後の1960年代から、ヨーロッパでは本格的な休

暇旅行が開始した。1962年当時、ドイツ人の国外旅行先の約3分の1はオーストリアであり、その宿泊施設は、低料金で利用できる農家などの個人の貸部屋が37%で最も高い割合を示していた(Schnell, 1991)。それは、当時はまだマイカーの普及率が低く、鉄道が主要な交通手段であったこと、一般大衆はホテルなどのような高い宿泊施設に長期滞在する経済的余裕がまだなかったからである。例えば図1に示したように、オーストリアのティロール州は、1961年当時すでに年間50万人以上の宿泊客を集めた Sölden, Seefeld のようなリゾート地もあったが、イン川とその支流やレヒ川沿いのアルプス谷間のほとんどの村々においても1~10万人の宿泊客があり、貸部屋などの経営によってドイツ人保養客を受け入れており、ルーラル・ツーリズムの主要な地域であったことが推察される(Haimayer, 1988)。また、宿泊施設の提供だけではなく、オーストリアのシュタイヤーマルク州のブドウ栽培農家のように、庭先を観光客に開放し、自家製のワインと軽食でもてなすブッシェンシェンケ (Buschenschenke) とよばれる観光農園もあった。ドイツではアルプスをもつバイエルン州を中心に、非営利組織であるドイツ農業協会 (Deutsche Landwirtschaft Gesellschaft, 略称 DLG) が指導・推進している「農家で休暇を (Urlaub auf dem Bauernhof)」政策のもとで農家の民泊施設を整えてきた。DLG は、農業関係の見本市などの活動を行ってきたが、1965年から農家民泊に興味を示し、1966年からは DLG の独自の基準による民泊農家を選定し、ガイドブックを発行することによりルーラル・ツーリズムを支えてきた(山崎, 1993)。イギリスの南西部や中部の過疎地域では、一部の農家が B & B 方式 (Bed & Breckfarst) による農家民宿を1960年代頃から始め、1970年代後半からは農家が経営するキャンプ場やオートキャンプ場なども増えていき(小山, 1993)、ルーラル・ツーリズムの受け皿が拡大していった。

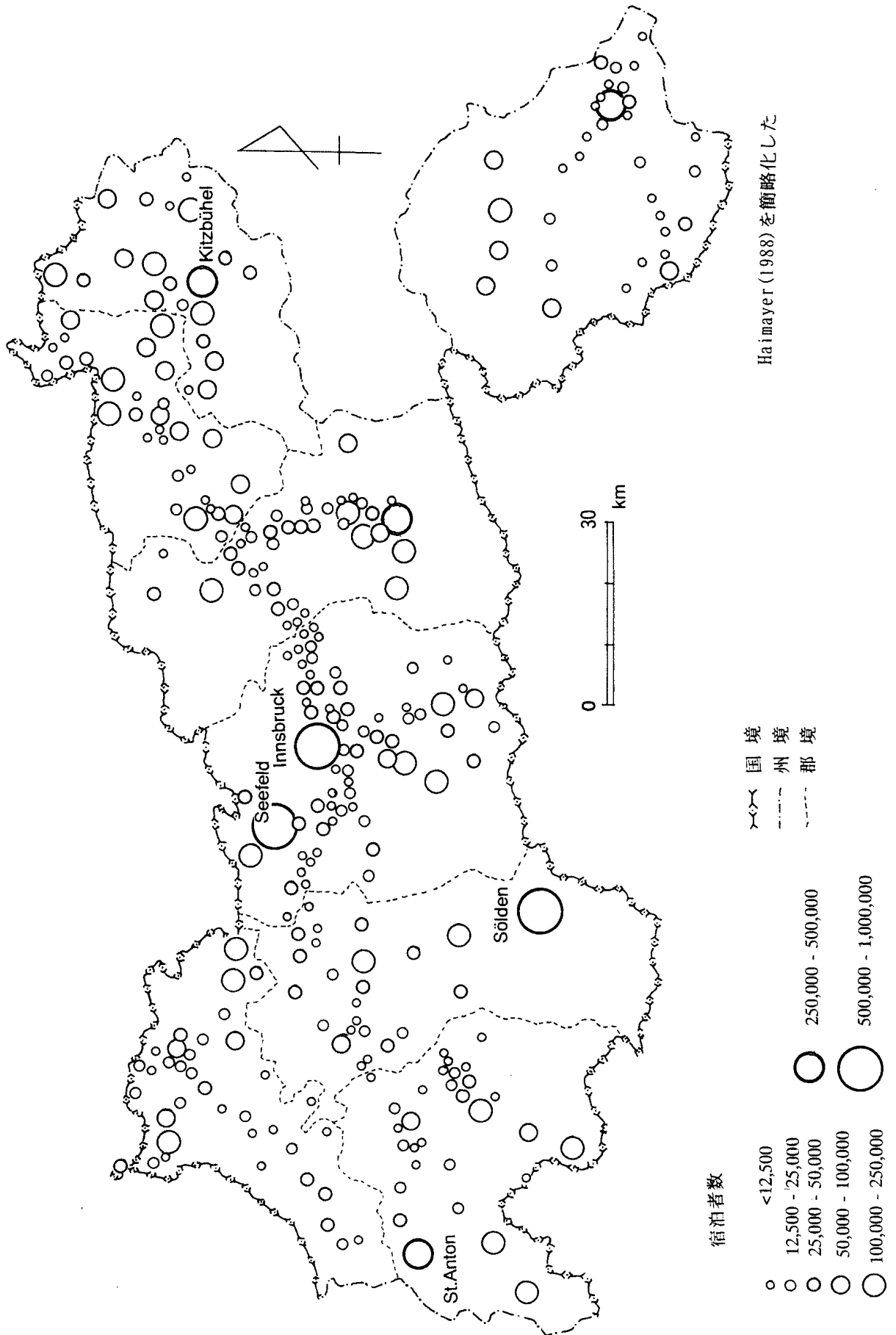


図1 ティロール州における市町村別の宿泊者数(1961年)

ところで、1970年代にはいると、航空機輸送やパッケージツアーの発達、あるいは自家用車が普及し、スペイン・イタリアなどの地中海の海岸リゾート地が急速に整備されることによって、夏の休暇客の多くがアルプス諸国から地中海諸国へと目的地を変えていった (Schnell, 1991)。しかし、地中海沿岸の海岸リゾート地へのマス・ツーリストの集中は、海浜や道路の混雑、空気や水の汚染など環境悪化が顕在化し (William & Shaw, 1991)、やがて、「砂浜 1 ヘクタール当たり観光客は何人までか」と題する論文 (Jungk, 1980) まで現れるようになった。一方で、冬の休暇旅行の機会が増大し、スキーの大衆化が進んだことにより、アルプスではスキー場・スキーコースなどが増設され、スキーリゾート地が拡大した。その結果として、高山帯や亜高山森林帯の生態系の破壊、雪崩の発生など環境問題のみならず、スキーリゾート地に建てられた近代的建築様式によるホテルやペンションによって農村景観の破壊が生じているという指摘もなされるようになった (Mosimann, 1981, 1986)。このように、マス・ツーリズムとそれに伴う観光開発が環境に負荷を与え、地域の伝統的な景観を破壊していることが指摘される一方で、環境に負荷を与えない「環境にやさしい」観光としてのソフト・ツーリズム (Soft Tourism, Sanfter Tourismus) がスイスやドイツにおいて提唱されるようになった (Jungk, 1980, Krippendorf, 1980, 1982, Rochlitz, 1988a, 1988b)。

ここで、ソフト・ツーリズムについて少し詳細に触れてみることは、グリーン・ツーリズムの本質を理解する上で意義あることである。さて、ソフト・ツーリズムという用語は、スイスの空間プランナーである Baumgartner が 1977 年に使用したのが最初であると言われている (Rochlitz, 1988a)。彼は、「第三世界の観光—発展に寄与するために」という記事を Neue Zürcher Zeitung 紙上に寄稿し、その中でソフト・ツーリズムを次の

ように概念づけた。それは、目的国においてできる限り多くの雇用の場をつくり、最適のコストと利用関係をもち、健全な生態的均衡を維持し、本物の情報を提供するものであると(Rochlitz, 1988aによる)。これは、発展途上国における観光開発が、地域の生態系を無視した資源の略奪的な開発であってはならないとしたものであり、今日的意味の持続可能な観光に関する先駆的主張と考えられる。しかし、ヨーロッパ観光におけるソフト・ツーリズムについての概念規定を最初に試みたのは、Jungk(1980)である。彼は上記の論文中で、R.Clarkeの提唱したハード・テクニックとソフト・テクニックに倣って、ハード・ツーリズムとソフト・ツーリズムという言葉を使用し、その対比を行った(表2)。それによればハード・ツーリズムは固定したプログラムで、高速交通機関を利用し、忙しく、騒々しいマス・

表2 ハード・ツーリズムとソフト・ツーリズム

ハード・ツーリズム	ソフト・ツーリズム
マス・ツーリズム	個人、家族、友人との観光
少ない時間	十分な時間
高速交通機関	相応な(またゆっくりした)交通
固定したプログラム	自発的決断
外部統制	自己統制
移入された生活スタイル	地方の習慣的生活スタイル
見学	体験
快適で受動的	活動的で疲れる
心の準備なし	訪問地についての事前の準備
外国語なし	外国語の勉強
優越感	学ぶ楽しみ
買い物(ショッピング)	贈り物をもっていく
お土産	思いで、日記、新しい知識
スナップ写真と絵はがき	写真、スケッチ、絵
好奇心	他人に対する思いやり
騒々しい	静か

(Jungk,1980)

ツーリズムであるのに対し、ソフト・ツーリズムは小グループの、地方の生活スタイルに従い、のんびりと静かな保養・旅行とすることができよう。同年、Krippendorf は『景観を食べる。観光と保養地の景観—破滅か恵みか?』という書物を著し、その中で、Jungk のハード・ツーリズムとソフト・ツーリズムの概念をさらに進展させ、対比させている (Krippendorf, 1982 による)。例えば、観光開発戦略の項目では、前者は無計画な開発、特別価値の高い景観を搾取し、経済的利点のみを考慮した開発であるのに対し、後者は開発の前に計画があり、価値の高い景観を保護し、経済的、生態的、社会的な利益・不利益を慎重に考慮した開発であると対比させている (表3)。つまり、ソフト・ツーリズムは地域の生態系に配慮し、自然と地域社会が共存した観光と捉えることができる。Krippendorf の書物は、マス・ツーリズムを主とした観光の発展によって引き起こされた観光地やリゾート地の生態的破壊に対し、中央ヨーロッパ社会の多くの人の感覚を目覚めさせることに成功し (Becker, 1995)、やがてソフト・ツーリズムがヨーロッパ社会の中に受け入れられ、観光産業や観光客の実践へと移っていく (フンク, 1994)。

例えば、フンクはオーストリアのフォアアールベルク州について次のように報告している。「フォアアールベルク州は、スキー客の増大によって年間1400万人の宿泊・日帰り客があり、観光収入は州の総生産の約2割に達しているが、交通量の増大などにより環境への負荷が増大した。そこで州政府は1978年に観光計画を立てた。この計画では経済より環境、観光客の利益より住民の利益、また量的な成長より質的な成長を優先するという長期的目標を立て、法律を制定した。例えば、景観を変化させるすべてのプロジェクトは景観保護法による許可を必要とさせ、開発の特に進んだ地域では新たな開発が禁止された。スキー場では、植物の成長促進が特に重視

表3 ハード・ツーリズムとソフト・ツーリズムにおける観光開発戦略

	ハード・ツーリズム	ソフト・ツーリズム
1	開発計画なし	開発前に計画立案
2	企画の考察	概念の考察
3	それぞれの集団の計画	大地域の集中化された計画立案
4	乱雑な開発	特別の地域に集中した開発
5	無計画で散在した建物	土地の保全, 建物の集中, オープンスペースの確保
6	特別価値のある景観を集中的に搾取	価値の高い景観の保護
7	新しい建物群, 新しい宿泊施設の建設	既存の建物を改善して使用
8	不確定な需要に対する建設	固定的限界での拡張
9	全地域の観光開発	適所のみ観光開発, 地元民の利用可
10	外部関係に委ねた観光開発	地元民の意志決定と参加の機会
11	すべての可能な労働力を使用 (もちろん外部も)	地域の潜在労働力を考慮した開発計画
12	経済的利益のみ考慮	すべての経済的, 生態的, 社会的な利益と不利益を慎重に判断
13	農民を土地所有者と観光労働力としてのみみなす	農業の保護と振興
14	社会によって支払うべき社会費用を無視する	加害者によって支払うべき費用を無視する
15	自家用車を好む	輸送機関の奨励
16	最大需要に対応した施設の準備	平均需要に対応した設備の準備
17	自然の障害を移動	自然の障害を保存
18	都市的建築様式	地方的建築様式(建物のデザインと材質)
19	観光リゾート地の一般的オートメーション化	選び抜かれた技術開発, 非技術的観光形態の推奨

(Krippendorf 1980, ただし Krippendorf 1982 による)

され、スキーコースに芝（草地）植生を敷くことが義務づけられた。騒音対策として夜中のオートバイ走行が禁止され、ヘリコプター・スキーが制限され、空気汚染対策として暖房排ガス規制、車両の速度制限などもなされた。さらに、駐車場をあまり提供しない(注2)などの処置もとられた」(フック, 1994)。

観光地におけるソフト・ツーリズム化は、ドイツやスイスでも実践されるようになったほか、宿泊産業も、例えば、朝食時にはゴミのもととなる個別包装をやめジャムポット方式にし、タオルの交換方法を改め（注3）、再生紙を使用するなど環境にやさしい経営が推進されてきている（Becker, 1995）。Danz (1985) が指摘しているように、自然との体験を考えると、少なくとも一部はテクニカルな社会的な生活基盤を放棄した “環境にやさしい客 (sanfter Gast)” なしには、経済要素としてのソフト・ツーリズム、またそれに基づいて存在している観光地は成り立つことができないであろう。このように、ソフト・ツーリズムの精神を理解した家族など小グループによる旅行者が、自然に負荷を与えることの少ないルーラル・ツーリズムを新たに指向してきたのであると考えることができる。

3. ルーラル・ツーリズムからグリーン・ツーリズムへ

観光地やリゾート地の環境悪化が社会問題化してきた1980年代中頃、スイスの観光学者 Krippendorf (1986) は、「新しい観光者—レジャーと旅行の転換期」と題する論文の中で、急速な広がりを見せている新しい一つの観光客のスタイルとして、批判的消費観光者 (critical consumer tourist) をあげている。それは日常生活だけではなく、休暇旅行の選択においても批判的消費者 (critical consumer) として性格づけられ、環境に調和した旅行形態を求める人であると解釈している。

環境に対して意識的な消費行動をとる批判家的消費者の増大と、環境に優しい観光であるソフト・ツーリズムの理解の広まりは、1987年5月にロンドンで開催された「農村地域における観光の新しい機会の考察」と題する会議に引き継がれていく (Johnes, 1987)。ここでは特に「グリーン・ツー

リズム (Green Tourism) とは何か」という問題提起がなされ、常住地域から離れた農村地域（都市化された海浜とスキーリゾート地を除く）での余暇活動を追求する人々の現象としてのグリーン・ツーリズム、農村地域で第2・第3の休暇を過ごす高い社会経済的階層に属する博識のある人としてのグリーン・ツーリストに関して議論された。

ここで用いられた、グリーン・ツーリズムの'Green'とは、単なる緑色の森林や緑色の大地を意味するものではない。この'Green'には、世界の環境保護団体である Greenpeace (1971年創設) やドイツの Die Grüne (緑の政党)、あるいは1988年に『The Green Consumer』(Elkington & Hailes, 1988)として刊行されて有名となった green consumer (緑の消費者) などのように、環境破壊に対する批判と問題解決のための行動意識を含んでいることを理解しておくべきである。したがって、グリーン・ツーリズムには、おのずとこの'Green'の概念が含まれており、広義には、ソフト・ツーリズムと同様に、環境にやさしい観光開発や経営、環境問題に意識をもった人々の観光行動と解釈され、それは農村地域の観光だけに限定されるのではなく、広く観光全般に適用させることのできる言葉である。ちなみに、『The Green Consumer』では Green Travel の項が設けられて、環境旅行組織やそのオペレータなどが紹介されている(注4)。

広義に解釈されるグリーン・ツーリズムではあるが、その第1の目的地は農村地域であることには間違いがなく、これによって1980年代後半からルーラル・ツーリズムが新たな展開をみせるのである。アーリ(1995)は、ルーラル・ツーリズムをポストモダンと位置づけながら、「1986年を例にとれば、サービス階級プラス資本家プラス中間管理職の3分の1は田舎に年に最低5回は行っている。これは、手仕事熟練労働者に比して50パーセント多く、半熟連・未熟練労働者に比して2倍であった」(アーリ, 1995, 174

頁)と、農村に出かける多くの人の中産階級であることを指摘している。これに関連して、ポルトガルの地理学者である Cavaco(1995)もまた、次のように述べている。「最近10年間、都市社会の中産あるいは上流階級の人たち (the medium, high and upper classes of urban society) によって農村地域が再発見され、ルーラル・ツーリズムが変化してきた。これらの階層の人々は、もはや農村における自己の遺産はなく、農村地域での農家との接触もなくなっている。そして、夏期休暇の海岸リゾート地へのマス・ツーリズムへの回避として、彼らは農村地域を訪問することを選択しているのである。つまり、彼らは太陽と海岸の代替として、孤独、プライバシー、休息、平穏と静けさ、個人的サービス、温かい人間関係を好んだのである。そして、よく保護された破壊されていない自然、多様性のある景観、歴史的遺跡や記念物などを保護することを支持し、農村地域では、散歩、サイクリング、湖や川でのスポーツ、乗馬などを楽しみ、伝統文化や民俗を学ぼうとしているのである」と。続けて Cavaco は、「最近のルーラル・ツーリズムは、新都市住民(neo-urban population)ではなく、むしろ農村との関係をほとんどもたない比較的裕福な都市住民(well-off city-dweller)を引きつけている」と分析し、このような観光客は、よく旅行をする教育された階層の人々であり、そして批判家的消費者であると指摘している。アーリはまた、「グリーン・ツーリズムは次世代のための地域確保と、それと合わせて野生生物の保護を確保する積極的な機能をもっている」(同上, 178頁)と、グリーン・ツーリズムには持続可能な観光とエコロジカルな観光の側面があることを述べている。

このように Cavaco やアーリの主張から判断すれば、ヨーロッパにおけるグリーン・ツーリズムは、環境問題に対する意識や地域の自然や文化に興味をもつ、中・上流の社会・経済階層のグリーン・ツーリストによる、

農村地域の環境や生態系に負荷を与えない休暇旅行をとる観光と結論づけてよさそうである。

したがって、この概念におけるグリーン・ツーリズムの普及には、人々の日常的な生活において'green'な生活習慣と知識を身につけることが前提となり、「一人前の観光客(mündigen Touristen)」になるための観光客の意識形成が必要である(Rochlitz,1988b)。この点に関し、イギリスではナショナルトラストや野鳥保護団体などの組織の会員が、1971年から1987年の間に500%以上の増大を示した(Thrift,1989, ただし Shaw & Williams 1994, 230頁による)ことは、国民の環境意識の向上とみなされる。特にナショナルトラスト会員は1991年現在215万人,国民の3%をしめるまでになり(向井, 1995), 会員は、ボランティアとして農場の修繕にあたるなど、農村景観の保全に寄与している(糸長 1991)。一方、ドイツにおける近年の環境意識の高まりと、徹底した環境政策に関しては、すでにわが国において知られていることであり、ここで改めて述べる必要はあるまい。ドイツ人の環境意識の高まりは、当然、ソフト・ツーリズムとして休暇旅行にも反映されており、フंक(1996)によるプファルツの森でのアンケートの調査結果は、それを端的に物語っている(表4・5)。例えば、「もっとお金

表4 もっとお金をかけてもよいもの

	数	%
環境にやさしい宿泊施設	41	47.7
ごみ, 排水処理の充実	32	37.2
自然農業食品	22	25.6
地域の名物	19	22.1
公共交通手段の充実	15	17.4
多様性のあるレジャー施設	15	17.4
スポーツ施設の充実	9	10.5

(フंक, 1996)

表5 休暇で重視すること

	とても重視する	全然重視しない
破壊されていない自然	63	0
ごみがない	54	0
きれいな湖・河	41	0
静か	55	0
町並み	34	0
田園風景	22	1
植物相・動物相	17	0
自然でのレクリエーション	20	3
地域の食べ物	14	4
自然農業の食べ物	9	9
公共交通手段の充実	5	15
自然での宿泊施設	12	22
スポーツ施設の充実	1	21

(フンク, 1996)

をかけていいもの」という質問事項では、「環境にやさしい宿泊施設」が第1位の回答であり、「休暇で重視すること」の質問では、「破壊されていない自然」や「ごみがない」などが高い評価を得たのに対し、「スポーツ施設の充実」は最も低い評価であった。こうしたドイツ人の環境意識の形成の背景には、学校における単なる知識だけを教える環境教育ではなく、実践的な環境教育が重視されている点を指摘しておきたい(横山, 1992)(注5)。

4. グリーン・ツーリズムの受け皿としての農村整備

これまで、主にグリーン・ツーリズムの展開を、都市住民の環境問題に対する意識変化と観光行動および観光行政の側面から述べてきたが、グリーン・ツーリストを受け入れる農村の側にも1970年代以降の変化があったことを見逃すことはできない。今日、グリーン・ツーリズムの対象となる

ヨーロッパの村々が、自然と人間の調和のとれた美しい景観を呈しているのは、地元住民の努力と農政や環境政策に負うところが大きいのである。

ヨーロッパでは、第2次世界大戦後の農業の近代化政策によって、開墾、農地整備、化学肥料や農薬の投下、大型農業機械の導入など農産物の増産や農業の合理化のための構造改善事業が行われてきた。それは、村の景観を特徴づけている森や小川や畦道、あるいはイギリスにおいてはエンクロージャー以来の伝統的な生け垣や石垣の消滅を伴い、森や小川の生態系の犠牲のもとになされてきた。農業の近代化における圃場の画一化、近代的建築物の構築、道路の新設や拡幅などが歴史的、風土的に価値のある農村の景観を変えてきたのである。1970年代に入ってから、それまで保ち続けてきた故郷の自然と景観が近代化によって失われることに対する危機感がヨーロッパ人に芽生え初め、農村の開発・整備のあり方に変化が現れてきた。

その一つとしてドイツでは、故郷の自然と景観を回復するために、農村地域における Biotop（生物の生活の場）の調査を行い、その保護・再生が行政の指導と住民の合意のもとでなされるようになってきた。これは、1976年に改正されたドイツの「農地整備法」の中で、農地整備地域の自然保護と景観保全が強く規定されるようになったからでもある（第37条、第38条など）。このような Biotop の保護再生は今日、ドイツ各地で実施されているが、例えば、ルーラル・ツーリズムの中心的地域であるバイエルン州では、1974年から農村地域に残された保護に値する Biotop の調査を行って、それを地図化すると同時に、農地整備に際する Biotop 保護の実践の手引き書を刊行した。また、ノルトライン・ウェストファーレン州の Rietberg の村では、かつて農地拡大によって直線化された河川を、近年行われた農地整備事業時に、河辺の Biotop を再生するために元の蛇行に近い流路に

戻す処置などの実践例が報告されている(Pflug,1980)。この Biotop の保護・再生は、貴重で珍しい自然地域や貴重な動植物を保護するためのものだけではなく、ごくありふれた自然を身近な場所に回復することも目的としている。

また、1961年より開始されたコンクール「Unser Dorf soll schöner werden わが村は美しく」は、各地の歴史的村落景観の保存・再生、農村の自然保護に大きく寄与してきた。これは、村の発展経過、村の伝統的建造物の保存・利用状況、新しい建物の周囲との調和、教会・広場・小川などの状態、典型的な野生動植物の保全状態、個人住宅の前庭の状況など39項目を評価して競うものである。このコンクールが始まった当初は、公共広場、道路、農場の清潔さ、個人の前庭の管理に大きな評価が置かれ、その後は木組みの農家・納屋などの歴史的建物の保存・再生状況、集会場、下水処理施設など村の社会資本の充実度などが大きな評価の対象とされるようになった。そして、近年では家並みを整え、花を飾り、村を清潔にするというまさにコンクールの題目のように村の美しさだけを競うのではなく、いかに村の自然を保護し、村の生態系に配慮しているか、換言すれば、いかに村が環境保護に寄与しているかが、大きなポイントになってきているという(Kreisverwaltung Unna,1985)。

イギリスやフランスにおいても、ドイツと同様に、農村における自然や景観の保全・再生が実施され、景観的にも、生態的にも多様性のある美しい農村が再生されてきている(注6)。どこにでもあるような自然ととらえられがちな農村地域の小川、生垣や石垣、森の biotop の保護・再生が行われ、集落の伝統的な建物の保存・再生がなされたからこそ、グリーン・ツーリズムの目的地として価値が高まったのである(桂, 1994)。そして、ドイツの「農家で休暇を(Urlaub auf dem Bauernhof)」で知られた農家民

宿(注7), イギリスの Farm Holiday Bureau に加盟した農家民宿, フランスのジット・ド・フランスに加盟した民宿などの他に, ペンション, ガストホーフ, オートキャンプ場など多種の宿泊施設, カヌーコース, サイクリング道や散策道, ベンチ, 野鳥観察小屋などの環境に大きな負荷を与えない施設が農村地域に整備されたことにより, 批判的消費者(critical consumer)であるグリーン・ツーリストを受け入れることができるようになったと考えることができる。

5. ま と め

近年のグローバルな環境破壊は, 人類の生存を脅かす危機的状況であると認識され, 1972年にはストックホルムで「国連人間環境会議」が開催されたのを初めとして, 「環境と開発に関する世界委員会」が1987年に発表した報告「地球の未来を守るために」のなかで「持続可能な開発 sustainable Development」が提唱され, さらに1992年の国連環境開発会議の「環境と開発に関するリオ宣言」に引き継がれていった。このような国際レベルでの環境問題に対する取り組みは, 国や地方の政策に反映させられただけではなく, critical consumer や green consumer など環境問題解決に対する意識をもった人々の出現にも寄与した。

観光の分野においても, ヨーロッパでは余暇時間の増大, 高速・大量交通手段の発達, マイカーの普及などによって地中海沿岸やアルプス山麓のリゾート地が大きく発展したが, その弊害, すなわち観光地, リゾート地の環境・景観破壊が顕在化した。このような問題に対処するため, ソフト・ツーリズム, グリーン・ツーリズムなど環境にやさしい観光スタイルが求められるようになり, それを自覚したグリーン・ツーリストの出現をみた

のである。世界観光機関(WTO)も、環境保全と共生した持続可能な観光開発を行うための指針を著した(田原 1996)。このような環境政策や環境意識の変化から、ヨーロッパではグリーン・ツーリズムが広まり、その主な目的地として農村地域が好まれ、ルーラル・ツーリズムが新たな展開をみせるようになったのである。

最後に、グリーン・ツーリズムは地域の環境と社会にやさしい観光という概念をもち、典型的なグリーン・ツーリストは、批判的消費観光者(Krippendorf 1986)であって、「博識があり、高い社会経済的階層からえり抜かれ、農村地域で第二・第三の休暇を過ごす人」(Johnes 1987)であることを強調しておきたい。なぜならば、わが国においてまさに推進されようとしているグリーン・ツーリズムには、この点の議論が不十分であるように思われるからである。これに関しては、別稿で論じたい。

注1：『Dokumentation - Möhnesee』(Verkehrsamt Möhnesee)の資料による。

注2：駐車場の制限は、地域には生態的な許容範囲があるので、一定以上の入り込みを拒否する入場制限的意味がある。

注3：筆者が1995年8月にドイツのフライブルクで利用したホテルのバスルームには「親愛なる顧客へ：世界のすべてのホテルで毎日何トンのタオルが不必要に洗濯されているかあなたは想像つきますか。莫大な量の洗濯によってわれわれの水に荷重を与えています。どうかあなた自身で決めてください。タオルの交換を望むなら、それを床においてください。もう一度使用するのであるならハンガーに掛けておいてください」という、シールが貼られていた。

注4：『The Green Consumer Guide』と類似の出版物として、『地球を守る1001の方法—緑の世界を築くためにあなたはどうか今の生活を変えたらよいか』(Vallely, 1990, ただし田中訳, 1991による)には、地方の農山村地区などでのGreen Leisureのあり方が解説されている。

注5：最新の高校程度の地理の教科書『Mensch und Raum 10』(Cornelsen), 『Erdkunde für Gymnasien in Nordrhein-Westfalen』(Westermann)にも、スキーコース建設に伴う森林破壊と景観破壊, スノーマシンによる植物生態系への影響, スキーリゾート地におけるマス・ツーリズムによる環境破壊の現状などが

記載され、その対処の方法としてのソフト・ツーリズムの必要性が述べられている。

注6：イギリスにおける農村の自然や保全については布林・グリーン著・小倉他訳(1994年)：『カントリーサイドを保全する』(農文協)に詳しい記載がある。フランスについては、農村開発企画委員会(1991)『環境と農地整備—フランス農村—』海外農村開発資料第29号が参考になる。

注7：「農家で休暇を」の思想は、ソフト・ツーリズムの概念と関連づけられており、生態的バランスを害することのない観光として位置づけられている(Schnell, 1991)。

〈引用文献〉

- アーリ, U. (加太宏邦訳) (1995)：『観光のまなざし』, 法政大学出版局, 289頁。
- 糸長浩司(1991)：英国型のグリーン・ツーリズムの示唆するもの。新しい農村計画, 67号, 20-30頁。
- 井上和衛, 中村功, 山崎光博(1996)：『日本型グリーン・ツーリズム』, 都市文化社, 252頁。
- 桂 瑛一(1994)：農村の環境保全と農村型レクリエーション。西村・堀田編著『農村の環境保全—英国の経験に学ぶ—』(富民協会), 56-70。
- 小山善彦(1993)：イギリスにおけるグリーン・ツーリズム。山崎・小山・大島著『グリーン・ツーリズム』(家の光協会), 13-56頁。
- 田原栄一(1996)：持続可能な観光開発のための指針。大分大学経済論集, 47巻5号, 90-113頁。
- フンク, K.(1994)：Soft Tourism のコンセプトとその実現。松山大学論集, 6巻4号, 81-97頁。
- フンク, K.(1996)：ドイツと日本における観光行動の比較とその組織的背景。日本観光学会第73回全国大会報告要旨, 32-33頁。ただし, 当日の配布資料を使用した。
- 向井清史(1995)：参加と交流による地域資源の保全と創造—イギリスのナショナル・トラスト運動。今村・永田編『地域資源の保全と創造—景観をつくるとはどういうことか』(農文協) 63-142。
- 山崎光博(1993)：ドイツにおけるグリーン・ツーリズム。山崎・小山・大島著『グリーン・ツーリズム』(家の光協会), 113-156。
- 山崎光博・小山善彦・大島順子(1993)：『グリーン・ツーリズム』, 家の光協会, 222頁。
- 横山秀司(1992)：ドイツ地理教育における環境問題(前編・後編), 地理37巻9号, 128-135., 37巻11号, 127-131。
- Becker, C.(1995)：Tourism and the Environment. A.Montanari & A.M.Williams "European Tourism: Region, Spaces and Restructuring", (John Wiley & Sons),

207-220.

- Cavaco, C. (1995) : Rural Tourism: The Creation of New Tourist Spaces. A. Montanari & A.M. Williams "European Tourism: Region, Spaces and Restructuring", (John Wiley & Sons), 127-149.
- Danz, von W. (1985) : Sanfter Tourismus. Eine Chance für ökologisch empfindliche Erholungsgebiete mit Beispielen aus Deutschland. *Jahrbuch des Vereins zum Schutz der Bergwelt*. Vol. 30, 95-105.
- Elkington, J., J. Hailes, & J. Makower (1988) : "The green consumer", Ben Cohen, Ben & Jerry's Homemade. ただし, Penguin Books (1980) 版によった。
- Haimayer, P. (1988) : Raumliche Strukturen und Prozesse des Tourismus in Tirol. *Österreich in Geschichte und Literatur (Tirol)*, 32, 103-119.
- Johnes, A. (1987) : Green tourism. *Tourism Management*, December, 354-356.
- Jungk, R. (1980) : Wieviel Touristen pro Hektar Strand ?. *GEO*, 10, 154-156.
- Kreisverwaltung Unna (1985) : Unser Dorf soll schöner werden. 51S.
- Krippendorf, J. (1980) : "Landschaftsfresser, Tourismus und Erholungslandschaft - Verderben oder Segen ?", Bern. (未見)
- Krippendorf, J. (1982) : Towards new tourism policies. The importance of environmental and sociocultural factors. *Tourism Management*, 3, 135-148.
- Krippendorf, J. (1986) : The new tourist turning point for leisure and travel. *Tourism Management*, 7, 131-135.
- Lane, B. (1994) : What is rural tourism ? Bramwell, B. & B. Lane "Rural tourism and sustainable rural development" (Multilingual Matters, UK), 7-21.
- Mosimann, T. (1981) : Geoökologische Standortindikatoren für die Erosionsanfälligkeit alpiner Hänge nach Geländeingriffen für Pistenanlagen. *Geomethodica*, 6, 143-174.
- Mosimann, T. (1986) : Skitourismus und Umweltbelastung im Hochgebirge. *Geographische Rundschau*, 38-6, 303-311.
- Pflug, W. u. a. (1980) : "Wasserbauliche Modellplanung Ems bei Rietberg auf landschaftsökologischer Grundlage". Landesamt für Agrarordnung Nordrhein-Westfalen, 115S.
- Rochlitz, K.H. (1988a) : Sanfter Tourismus im Alpenraum. *Geographische Rundschau*, 40-6, 14-19.
- Rochlitz, K.H. (1988b) : Sanfter Tourismus; Entwicklungsfaktor für den ländlichen Raum in den Alpen? Innsbrucker Geographische Studien 16. 233-244.
- Schnell, P. (1991) : The Federal Republic of Germany: a growing international deficit ?, Williams, A.M. & G. Shaw "Tourism & economic development - Western European experiences", (2nd edition) (John Wiley & Sons), 207-224.

Shaw,G. & A.M.Williams : "*Critical issues in tourism - a geographical perspective*", Blackwell(Oxford), 280P.

William A.M.& G.Shaw (1991) : Western European tourism in perspective.

Williams,A.M.& G.Shaw "*Tourism & economic development - Western European experiences*", (2nd edition) (John Wiley & Sons), 13-39.